

平成27年度日本医療薬学会 がん専門薬剤師海外研修に参加して

大垣市民病院

宇佐美英績

Eiseki Usami

はじめに

日本医療薬学会がん専門薬剤師海外派遣研修員として、2015年5月29日から6月5日までの期間、米国シカゴで開催された第51回 American Society of Clinical Oncology (ASCO) Annual Meeting への参加と University of Michigan Hospital での研修に参加する機会をいただき、ここに報告致します。

1. ASCO

今回で51回目を迎え全世界から3万人以上の oncologist が集結し、今後の標準治療となり得る情報が発信される場でもある。その会場は、スクリーンや人の多さに圧倒される程であり臨場感あふれる場であった。今年の発表全体では分子標的治療、個別化治療はもちろん、免疫療法に関する発表が多く、がん領域における次世代治療到来という思いを感じた。一番注目度の高い Plenary session の第1には、「Nivolumab, Ipilimumab Combination Effective in Advanced Melanoma; Cost Questions Raised」と題して、進行黒色腫患者に対する抗 PD-1 抗体 Nivolumab と抗 CTLA-4 抗体 Ipilimumab 併用療法の phase III の結果が報告された。PFS と



写真1 ASCO 会場にて

奏効率を改善したものの、医療費問題が残されているという結論で発表を終えられ、その後の拍手喝采は免疫療法の注目度の高さが伺え、会場にいる臨場感を堪能することができた。

その他、興味のある発表には、FLT3 変異を有する急性骨髄性白血病に対する経口 FLT3/AXL キナーゼ阻害剤「ASP2215」の第 I, II 相臨床試験における認容性、前治療歴のある多発性骨髄腫に対する抗 CD38 抗体 Daratumumab の有効性、再発多発性骨髄腫に対するプロテアソーム阻害剤である carfilzomib の有効性を示したものなどがあ

り、新たな標準治療となり得る内容でとても興味深いものであった。会場においては、ASCO 専用アプリを使用することによりスムーズに予定管理ができ、iPhone、iPadなどを片手に会場内を移動する参加者が多かったことが印象に残るものであった。

2. University of Michigan Hospital

ミシガン大学病院は、ミシガン州アナーバーにあるシカゴとは違って変わって緑の多い街にあり病床数は990床、薬剤師数150人、フルタイムの全従業員は320人で広大な土地の中にある。がん治療はUM Comprehensive Cancer Centerで行われ、扱うがん腫はメラノーマ、消化器系がん、血液がん、前立腺がん、乳がんの順で多いとのことであった。

初日の午前中は、血液内科病棟にてBCOP (Board Certified Oncology Pharmacist) の仕事を拝見した。病棟において、Physician Assistant (PA)、Nurse Practitionerなどのコメディカルや医師らと共に患者に対する情報の共有を行い、意見交換を行う時間が非常に多い点に気が付いた。仕事のスタイルは、専用のスペース、電子カルテがありコーヒーを飲みながら時間的余裕がある感じではあったが、Tシャツによれよれの白衣ではなくネクタイ姿で自信を持って仕事をしている姿が印象的であった。ランチタイムでは、アメリカの薬剤師の方々と意見交換の場を設営していただけたとのことであ

あったため、出発前に興味のある医療費問題、薬剤師教育、アメリカにおける薬剤師の立場、報酬の事などの話題を自己の意見を書きとめて臨んだ。

日本との違いが一番感じられたことは薬剤師教育であった。University 4年(薬学的基礎を学ぶ)+Pharmacy school 4年(臨床を学ぶ)を終えPharm.D.(臨床薬学博士)となり、さらに2年の臨床経験を経てようやくClinical pharmacist(がん専門薬剤師など)に至るとのことであり、実践で即、臨床の場で活躍できるのは、レジデントとして多くの時間を臨床の場で教育を受けていることが日本との格差であると驚きを感じた。また、薬剤師の社会的立場も確立されており、Pharm.D.となれば初任給も日本の2倍以上であることもモチベーションを保つことのできるひとつではないかと感じた。

2日目は、小児移植チームの回診に同行した。患者毎に部屋の前で10-15分の時間をかけて、時には家族を含めて意見交換をしながら行っていた。医師からは薬剤の選択、投与量、薬剤相互作用を問われ、実に堂々と薬剤師としての意見を発言していた。回診時に家族からも直接、詳細な薬の説明や食事のことなどを問われ、信頼関係が構築されていると感じた。働く場である環境面では、BCOPに広いスペースの専用部屋も与えられ充実していた。小児移植チームに携わる薬剤師は、1人ではなくチームを組み活動し、有給休暇もしっかりと取られていた事にも驚きを感じた。また、



写真2 ミシガン大学にて



写真3 講義風景



写真4 ランチタイムでの意見交換会

臨床現場での活動だけではなく、リサーチなどの研究活動を行いデータ作りにも余念がないことも大きな違いと感じた。今回の研修で、日本のがん薬物療法に我々薬剤師がどのように関わり貢献す

べきなのかを再認識し、今後の大きな課題を自分自身に与えられた様に痛感した。

謝辞

最後となりましたが、このような機会を与えていただきました日本医療薬学会会頭佐々木均先生、がん専門薬剤師認定制度委員会委員長濱敏弘先生、がん専門薬剤師認定制度委員会委員谷川原祐介先生ほか関係者の皆様に心より感謝いたします。また、同行していただきました日置三紀先生、花房加奈恵先生に厚く御礼申し上げます。そして業務多忙の中、本研修への参加を承諾していただきました大垣市民病院薬剤部の皆様に深く感謝致します。